

# まんだら通信

第238号 (通巻273号)

平成28年04月 西暦2016年 佛暦2582年 皇紀2676年

安房国八十八ヶ所 第一番札所  
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高栴 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org

## 縄文時代って

今から一万五千年前から二千五百年前までを縄文時代と言うそうです。今年が西暦二千十六年ですが、イエス様がお生まれになった頃のことです。え、とんでもない昔のことですから、何倍も昔の縄文時代の始まりなど、とても想像できません。

世界にはその頃、インダス文明、エジプト文明、メソポタミア文明、シナ文明などが栄えている一方、日本の縄文時代という『狩猟採集生活』で、不安定で貧しい暮らしだったとずっと思ってきました。

ところが、最近の考古学の研究では青森県津軽半島外ヶ浜町の『大平山元一遺跡』から出土した



土器は一万六千五百年前の世界最古のもので、内側の焦げ跡から煮炊きに使ったことが分かるそうです。その時一緒に見付かった矢じりなどの狩猟具は、これも世界一古いものだということです。食べ物は粟、シイの類、ブナ、クルミなどの実、ヒョウタンや山菜、芋類など。特に粟は、DNAを調べると、すべて一つの親からでたもので、つまり最も勝れた親木を、接ぎ木や挿し木で増やしたものだということです。他に、現在と同じすべての種類の魚介類、ウサギや鹿など。酒類も作っていたそうです。上の写真は三内丸山遺跡の集落の全体で、計画的な地域作りが行われ、数百人は暮らしていただろうと言われます。規模は色々ですが、北海道から沖縄まで、日本全国にこういう遺跡があります。(私も中学生の頃、貝塚を見つけたことがあって、名前を滝口貝塚といいます。)

右は集会所ではないかという、三百人は収容できる建物と、不思議な六本柱の構造

物です。栗の木の直径一メートル、高さ二十メートルの柱が復元されていますが、何の目的があったのか分かっていないとか。ただ、この巨大な木材をセンチ単位で正確に建てた技術は、随分勝れたものだったと言われています。

ほかの写真は土偶と土器類です。芸術の話は私には分かりませんが、これほど複雑で装飾性の高いものを作るからには、技術者として勝れた腕前を持った人たちがいたということですね。

土偶や土器の他に、翡翠のアクセサリなども出土します。その頃の人たちは、現代の我々が想像するよりも遙かに心が豊かだったのだろうと、羨ましく思います。

発掘した人骨を見ると、縄文時代一万年以上を通じて、集団で戦ったり争った跡が見られないことが、世界に例を見ない何より特異なことだそうです。

世界の他の地域では今に至るも及ばず、台湾では高砂族と言われる先住民は日本領になるまで、パプア・ニューギニアでは、太平洋戦争の



頃まで首狩りの風習が残っていました。

北海道洞爺湖町の入江貝塚で見付かった四千年前の人骨は、DNAを調べた結果、小児まひの二十歳の女性だったそうです。手足の大きさから考えて自力で暮らせる身体とはとても思えないことから、家族や地域でこの女性のお世話をしていたということが考えられます。

人に優しく、争いごとを好まない日本人の性格は、縄文時代からずっと変わらないということと、神話の場合も、争って相手を滅ぼしてしまおうと言うことがありませんでした。それ以前の土着の神様もお社を建てて祀っています。

お寺での毎日の勤行には、お檀家のご先祖や戦没した人たちと一緒に、縄文時代からの土地の神様へのお祈りを、欠かさずお称えします。人を憎んだり恨みを持つたりせず、人に優しい性格を伝えてくれた縄文のご先祖を思う時、日本に生まれて本当に幸せだったと、感謝の気持ちでいっぱいになります。



につぼん人情小唄 三遊亭鳳豊  
第一二三話 カズオ

いやいや、この頃、町を歩いていても、電車に乗っても、お年寄りが目立ちますねえ。

特に、昼間。天気の良い昼間の市内バスなど、おじいちゃんやおばあちゃんばかり。そんなこともあるのかもしれないが、東京では、バスのスピードを落としたりたそうですよ。昼間は特にゆっくりゆっくり、のろのろ走っています。

あんまりのろいんで、客が運転手に聞いたそうですよ。「それにしても、なんでこんなにスピードを落とすんですか」。運転手はこう言ったそうです。「はい、普通に走っても都バス（飛ばす）と言われますから」と。

それにしても、先日認知症で徘徊して、電車に懐かれたおじいちゃんが訴えられた事件で、無罪になって本当によかったですね。

でも、これから、こうしたことがあちこちで起こるでしょうね。

二〇一五年一月の厚生労働省の発表によると、二〇二五年の認知症患者は現状の一・五倍の、七百万人を超えるそうですよ。これに、軽度の認知症患者を含めると、なんと約千三百万人、六十五歳以上の三人にひとり認知症になるという計算があるそうです。

そうしたなかで、日常の暮らしのなかで認知症の始まりではないかと思われる言動を示した、認知症患者を持つ家族の会が作成した「認知症早期発見の目安」というのを御存知ですか。「こんなことがお父さんやお母さんにあつたら、認知症かもしれませんよ」というテストです。

ちょっとそのテスト内容を見てみましょうかね。たとえば、こんなことがあつたら、専門家に相談してみてくださいという事です。

一 電話で話していて、切ったとたんに電話の相手の名前を忘れる

二 お釣りをもらっても数えない。計算ミスが多くなった

三 テレビのドラマの筋がじっと見えても、時々わからない時がある

四 慣れた道なのに、「あれ、右に行くんだっけ」と

五 この頃、「なんだか様子がおかしいよ」と他人に言われる

六 身だしなみにまったくかまわなくなってきた

七 作る料理の味が変わった。特に食べたいものがなくなった

八 自分の失敗を人のせいにする

九 外出時に、持ち物を何度も確かめる

なんだか、認知症でなくとも、身近にありそうな例ですね。

今日は、北九州の認知症患者たちがお世話になっているある施設での、ちよつとだけホツとする話をご紹介します。

北九州市小倉区にお住まいの高林一男さんとお母さん、セツ子さんのお話です。

一男さんは六十歳。お父さんが早く亡くなったために、学生時代からずっと、お母さんと二人暮らし。お母さんは、行商をやりながら、一男さんを育てたそうです。一男さんも高校を卒業後、地元の中企業で働き、行商をやめた母との二人暮らしをはじめましたが、その後、縁がなかったのか、ずっと独身でした。

そんなお母さんにちよつとした変化が起こったのは、一男さんが定年退職した頃でした。最初は、同じことを何度も言う程度でしたが、しまい忘れ、置き忘れが増え、いつも何かを探しているようでした。

（まあ、おふくろも八十歳を過ぎたから、年のせいだろう）とタカをくくっていたのがいけなかったのでしょうか。そのうち、「お前が盗んだのだから」という認知症特有の被害妄想が現れ、「ここはどこだ。家に帰る」と言つて、お決まりの徘徊まではじまってしまったのです。そして、転んで、大腿骨折。入院から戻ってきた時には、完全に認知症になつてしまつていたそうです。

こうなると、どんなに親孝行の一男さんでもたまりません。四方八方手を尽くし、なんとか年金で入れる施設に入所させることができました。家から車で二時間かかりますが、

とても評判のいい老人介護施設でした。

しかし、一人息子の一男さんにとっては、ここまで育ててもらつたお母さんを施設に任せっぱなしではお母さんに申し訳ないと思つたのでしよう。

一週間に一回、車を走らせるだけで片道四時間という山の上の施設まで、お母さんに会いに行きました。

「お母さん、来たよ。誰だかわかる？」

一男さんは満面の笑みで、ヘルパーさんに車椅子に乘せられて現れたお母さんに声をかけました。

「どちらさまでしようか」「何、言ってるんだ。カズオだよ。カズオ」

お母さんは無表情です。ヘルパーさんも「息子さんですよ」と言つても、ムツとした顔で、「あっちに行け」と言わんばかりに、手で追い払います。

（今日は、機嫌が悪いのかもしれない）と思つた一男さんは、いったん家に戻り、また一週間後に来てみることにしました。

「お母さん、来たよ。誰だかわかる？」「どちらさまでしようか」「カズオだよ、カズオ」

二度目も三度目も同じでした。六十年もいっしょにそばにいた息子の顔を母親が忘れてしまふのが、認知症なんですね。それでも、あきらめずに息子さんは、またお母さんに会いにいきました。すると、四回目は、

ちよつと雰囲気がちがいました。お母さんのまわりに、たくさんのおばあちゃんが車椅子で集まつて、彼を迎えてくれていたのです。

お母さん以外は、みんなニコニコしています。なんだかうれしくなつた彼は、お母さんにいつものように声をかけました。

「お母さん、来たよ。誰だかわかる？」

すると、お母さんが声を発する前に、まわりのおばあちゃんたちが一斉に大きな声でこゝろ叫んだそうです。

「カズ・ズ・オ」

▼4月8日は花祭り。言わずと知れたお釈迦さまのお誕生日です。里山の木々も、やわやわと浅葱色に芽吹き、スミレ、タンポポ、レンゲソウなど、春を待ちかねた野草たちが賑やかに咲きつります。

南の仏教国では、五月の満月の日を誕生日として祝いますが、四季のメリハリのある日本で、4月というのは一番相応しいと思います。紫雲寺でも例年通り、名倉の親戚でもらつた生花で、賑やかな花御堂を飾りました。

子供の頃、『野がけ』といって、おいなりさんなど重箱に詰めてもらつて、薄暗くなるまでお寺で遊びました。▼運と災難はいつ来るか分からないといいますが、昨日夕方、パソコンが突然動かなくな

り、真っ青になりました。

この『まんだら通信』も同じですが、控えは最低でも別の2ヶ所に必ず作っておくのですが、本体が動かなくなると完全にお手上げ。

こんな時、頼りになるのは、メーカーのサポートセンターです。2時間でも半日でも、先様の電話料金で懇切丁寧に教えてくれます。買う時は安い方が良いと思いますが、イザという時の分も値段に入っていることを思うと、安ければいいと言うものでもないかと、つくづく思いました。アップルという会社は、その点で一級です。パソコンが復旧したので、これから印刷を始めて、運が良ければ、今日のうちに区長さんにお届けできます。

▼今月の野草はカザグルマ【キンポウゲ科センニンソウ属】です。昔は割合にありふれた野草で、近くでは清澄の東大演習林などに生えていたそうですが、蔓性で高くなりますので、盗掘で殆ど絶滅したそうです。写真は船橋に自生しているものの子孫です。花の直径は8センチぐらい。花弁は殆ど白ですが、他の地方には赤や空色など、色々あるようです。

幕末、イギリスなどに渡つたカザグルマが、華やかになって里帰りしたクレマチスの親ですね。 2016.04.10 龍涉

